

# 刀剣の歴史と思想

## 第6回

酒井 利信

## 道教と剣

中国刀剣思想の重要な顔として、道教にかかわる剣の思想がある。

武器としての優れた実用性から発した剣を神秘化する思想であるが、武器としての主役が諸刃の剣から片刃の刀に移行した後も、今度は戦場ではなく道教という宗教思想の世界の中で息づいていく。

これまで見てきたように、剣を神秘化する思想に従来の中国思想が関与するというだけではなく、道教という思想そのものの中で剣が神聖なものとされ、呪術や神仙方術などとかかわっていく。

道教は、古代中国と日本の刀剣思想を、根幹において結びつけるもので、思想的に重要な役割を果たすものである。

### ▼道教について

道教は、儒教、仏教とならんで中国三大宗教の一つといわれるが、では道教とは何かといわれると学術的には明確な答えを出しにくいというのが現状のようである。

様々な説があるものの、ここでは道教を一応以下のように考えておきたい。

中国固有の土着的な信仰の中から自然発生的に形成されたもので、漢民族の古くからの思想信仰を集大成したものが道教である。その中には古来の巫術や老莊道家の思想、陰陽五行説や神仙思想なども含まれる。このほかに、易の思想や星辰（星や星座）の信仰も大いに関係していると考えられる。こういった大きな概念で、道教を捉えておきたい。



## 刀剣の歴史と思想

### 第6回「道教と剣」



董仲舒（『歴代古人像賛』より）

特に刀剣思想とのかかわりでいうと、この中でも、易の思想や星を神格化する星辰の信仰、古来のシャーマニズム的な呪術、あるいは不老不死の仙人になることを求めた神仙方術などに注目しておきたい。

道教は頻繁に儒教との対比において語られることが多い。前漢の紀元前一三〇年、董仲舒の提言が武帝に採用され儒教が国家の教学になって以来、儒教は華々しく歴史の表舞台を歩むが、道教は裏方に回ることになる。しかし、刀剣を武器以上に神聖視する観念は儒教にはみられず、道教に顕著である。中国刀剣思想の中でも、道教における剣は特に重要である。

道教については、福永光司氏の優れた研

究があり、剣の思想についても触れている①。ここでの道教の捉え方、あるいは剣の思想にかかわる史料の読み方については、氏の論説を大いに参考とした。

### 星の信仰と剣

道教において剣を神聖視するような思想には、道教に集大成されてきた従来の思想とのかかわりの中で形成されてきた、いわば道教以前からの流れというものがある。

繰り返しになるが、合理的、具体的思考を好む古代中国人は、剣をそれそのものとして神聖であるとは考えず、その神聖性に明確な理由を求めた。これは道教においても同様である。

結論を先取りするようであるが、道教における剣の神聖性の根拠づけ方には、二通りある。

一つには、剣を作る過程において、陰陽に代表されるような対立、相待にある事象を、剣に統合させていくような思考である。

これは、易の思想にもとづく世界観を前提

道教における剣の神聖性の根拠づけ方

① 作剣過程における対立相の統合

② 星との関連づけ

とした思考である。もう一つは、星を剣と関連づけて神聖性を認識するような仕方である。この背景には星辰の信仰がある。

前者については、干将莫耶の宝剑伝説を取り扱った際にすでに述べてきており、道教の中の事例については後で紹介することとして、ここではまず星と剣について知ることからはじめたい。

古代中国における星の信仰については、天命思想とのかかわりで理解することができ

る。斬蛇の三尺剣をもって天下を統一した漢の高祖が、自らの偉業を天命によるものといったエピソードの背景にあった、あの天命の思想である。

古代中国において、地上での出来事は、全て天の意志によって起こっていると考えた人々は、当然のことながら事前に天の意志を知ろうとする。特に地上において人心を束ねる皇帝には、重要なことであつた。彼らは徐々に、天命は天を運行する星の相によって現れると考えるようになる。そのため





や流星の出現と、地上での出来事を関連づけて解釈した。

天文占星術は、戦国時代末かあるいは漢

の初めころから盛んに行われるようになったという。前漢に著された『淮南子』の「天文訓」や、その後に記された『史記』

「天官書」などは、当時の占星術を知りうる史料である。

星は、地上の生死禍福を司る絶対的な存在である天の意志を示すものであるから、必然的にこれも神聖視されるようになる。特に、天体を観測する上で基準となる北極星や、その周囲をめぐる北斗七星は神聖なものとされ、神格化さえされる。

こういった信仰の流れの中、古代中国人は、古くから星を剣に直接彫りこむことによって、剣の神聖性を認識しようとした。いや、星を彫りこむことによって、剣に神聖性を意図的に付与しようとしていたと考えて良いかもしれない。

『呉越春秋』には、春秋時代の呉国の名将である伍子胥の剣に、北斗七星が刻まれていたことが記されている。

また、六朝時代、陶弘景という人が著した『古今刀剣録』には、夏王朝（紀元前二十一世紀頃～前十六世紀）の創始者といわれる禹の子でその位を継いだ啓という人物が、星辰を刻みこんだ銅剣を鑄造したことが記されている。禹および啓も伝説上の人物であり、この記述の史実としての信

## 刀身に北斗七星が彫りこまれた日本の「七星剣」



七星剣・国宝（四天王寺蔵）



（拡大写真）



呉竹鞘杖刀（正倉院蔵）

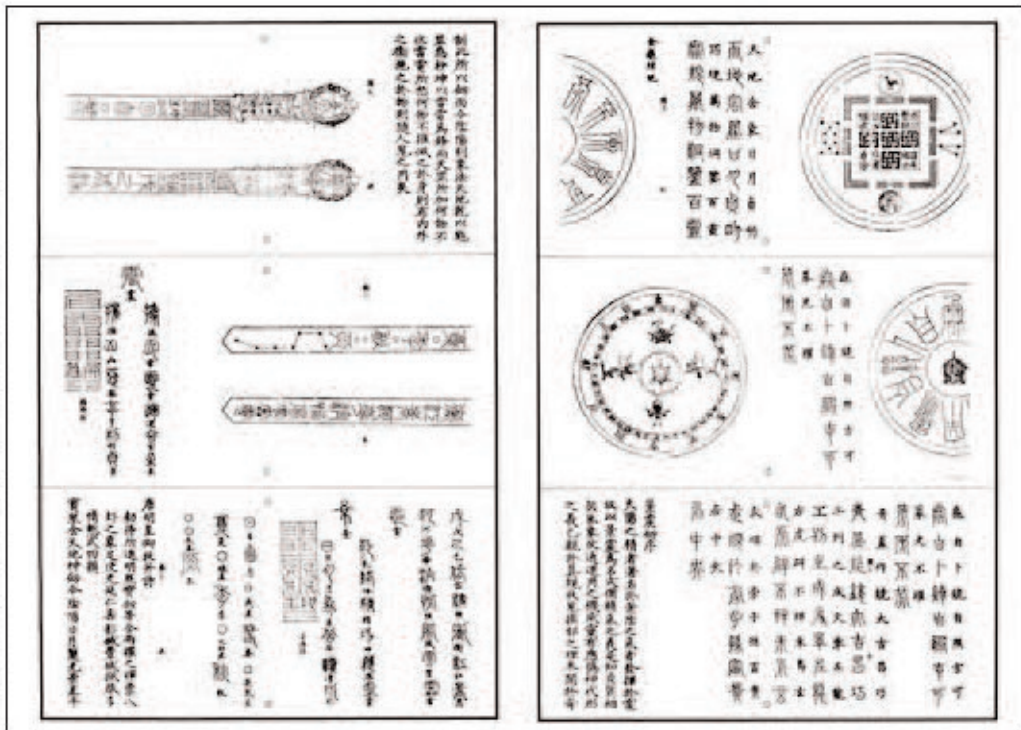
＜『新版日本刀講座第1巻』雄山閣出版、1973年より＞

天命思想

星を神聖視

星を剣に彫り込む

唐の時代の道士である司馬承禎が著した『含象剣鑑図』には、剣に北斗七星を彫りこんだ図が描かれている



憑性<sup>びようせい</sup>については注意する必要があるが、中国に古くから剣を星と関係づけてその神聖性を認識するような思考があったことは確認できる。

日本にも刀身に北斗七星を彫りこんだ上古の七星剣が各所に現存するが、こういった思想の流れであることは確かである。

北極星や北斗七星といった星を神格化する思考は、道教思想の中でも展開される。例えば、道教では北極星を神格化してこれを北極紫微大帝や天皇大帝といい、北斗七星を神格化して北斗真君や天罡<sup>てんこう</sup>といった。

そして道教思想の中でも、剣は星との関係で神聖視される。先の『古今刀剣録』を著した陶弘景も道教

を修めた道士である。

また、唐の時代の道士である司馬承禎<sup>しばしょうてん</sup>が著した『含象剣鑑図』には、剣に北斗七星を彫りこんだ図が描かれている<sup>(2)</sup>。

剣を星によって神聖なものとした事例である。

## ▼辟邪の剣

道教における剣の神聖性の認識の仕方は、先に述べたとおり二通りある。

繰り返しになるが、一つは星を施すことによるものであり、もう一つは易の思想にみる世界観によるものである。これらの剣の神聖性の根拠づけ方を具体的に確認しつつ、こういった剣が道教の中でどのような働きをしていたのかということにも注目していきたい。

まずは先にあげた『含象剣鑑図』に着目すると、北斗七星を施した剣の図の前に「景震剣序<sup>けいしんけんじょ</sup>」と題する一文が記されている。この文には、剣について、「而して天罡<sup>てんこう</sup>の加うる所、何物か伏せざらん」(北斗七

根拠づけ方  
と  
機能





辟邪の剣

星である天罡を施せば、何物も伏さないものではない）ものとして記されている。明らかに星の信仰をもとに剣の神聖性を述べている。そして、この剣は「何物も伏せざらん」ものであるという。

また、次の一文にも注目してみたい。同じ「景震劔序」では、この劔の神聖性について「此れ劔面の陰陽に合し、刻象の天地に法る所以なり」と記している。つまり、そもそも表裏一体の形をした劔は、陰陽が合していることを表しており、この劔に星が刻象されていることは天地の理になっ

ているため、この劔は神聖であるという理屈である。星の信仰をもとにした劔の神聖性の認識のほかに、易の思想をもとにした認識の仕方をもしているということである。劔を、陰陽を俯瞰し統一したものと

して理解する仕方である。そして、こうして神聖性を認識された劔は、「鬼を収め邪を擯く」ものであるという。

先の「何物か伏せざらん」剣も、ここでいう「鬼を収め邪を摧く」剣も、いずれもここには邪を辟ける辟邪の剣の姿がある。

道教において、剣を辟邪の機能をもつも

のとし、この剣の神聖性を星の信仰と、ほかに易的論理にもとづいて説明するような思考は、なにも『含象剣鑑図』に限ったことではなく、ぼくちんくし『抱朴子』などにも確認できる。

『抱朴子』とは、道教の根本聖典といわれることがあるほど重要な文献である。東晋の道教理論家である葛洪（かつう）が三一七年に著したもので、内編と外編とからなり、道教にかかわる事柄は内編に記されている。

『抱朴子』の中では、特に劍に限ったことではないが、呪術の効果が期待される武器について、それぞれ星との関係から説かれている。『抱朴子』に星の信仰は顕著である。

一方特に剣について、易の思想をうかがわせるものとして、以下の記述がある。

童男童女を令て火を進めしめ、牡銅を取りて以て雄劍と為し、牝銅を取りて以て雌劍と為し、——中略——之を帯びて以



葛洪著『神仙伝』に描かれた仙人の絵  
（『中国古典文学大系8』平凡社、1971年より）

て水を行けば、則ち蛟龍てうりよう、巨魚きょぎょ、水神すいじんも、敢て人あへに近づかざるなり。

これは、江<sup>かわ</sup>や海を渡るのに蛟龍をさける方法があるかという問いに対する答えである。これを帯びれば蛟龍や巨魚、水神も近づくことができないう銅劍を作る描写であるが、童男と童女に爐<sup>ろ</sup>の火をたかせ、出来上がった牝<sup>めす</sup>の銅から雌劍を作り、牝<sup>めす</sup>の銅から雄劍を作るといふ。

より具體的な記述であり、干将莫耶の作劍の描写と非常に似かよっている。ここには明らかに、易の思想にもとづく世界觀を背景に、對立、相待にある事象を劍に統合



させていくような思考が認められる。  
そして出来上がったこの剣は、「蛟龍を辟くる」ところの辟邪の剣である。

星辰信仰か易の思想か、いずれの理由づけにせよ、道教において剣は辟邪の剣として機能していたということがわかる。

### ▼ 剣による呪術

これまですでに明らかのように、道教における剣はもはや通常の武器ではなく、呪術の道具である。

通常の武器としての剣では、「鬼を収め

邪を摧く」ことも「蛟龍を辟くる」ことも不可能である。剣をもって呪術的に邪を辟けたということである。

『抱朴子』に「符と剣とは以て鬼を却け邪を辟く可きのみ」(符と剣をもって鬼をしりぞけ、邪をさける)と記されているのは、剣が符(お札)と同様に呪術的に機能していたことをあらわしている。

『抱朴子』は、神仙方術について述べる。神仙とは、不老不死を獲得して神通力を駆使することのできるいわゆる仙人のことである。この仙人が実在することを力説し、仙人になるためには金丹(さんたん)という仙薬(せんやく)を飲むことを説く(3)。仙薬の材料は山に入って

採取しなくてはならないが、その際の危険をさけるための呪術に剣が一定の役割を担っていたようである。

道教における辟邪の剣とは、辟邪の呪術の剣であつたということである。

少し趣を異にするが、道教には尸解(しかい)というものがある。不死を獲得した者が、実際に死んだかのようにみせて仙人となる方法である。魂は一度肉体からはなれ、後にしばらくして仙人としてこの肉体を取り戻すという。この時、形見として様々なものを残していたが、しばしばそれが剣であつたという。これを特に剣解(けんかい)といった。

『抱朴子』には、黄帝が剣解をはたしたこ





## 刀剣の歴史と思想

### 第6回「道教と剣」

とが記されている。

時代的にはかなり後になるが、北宋の張君房が編纂した『雲笈七籤』にも、剣をもって尸解をはたし、形見として残されたこの剣が、五百年後に道術に必要なものとしてもとの仙人に戻されるということが書かれている。そしてこの剣は、「常に身から離さず以て自らを衛る也、既に以て邪魔を逐い辟くるに足る」<sup>(1)</sup>（常に身から離さず帯びていれば、邪悪や悪魔を追い払いさけることができる）ものであるという。神仙方術において剣は、尸解という呪術において重要な役を担っており、かつこの剣はやはり辟邪の呪剣であった。

#### ▼道教における剣と鏡

最後に、道教における剣の思想で重要なことに、もう一つ触れておきたい。それは、道教には、剣を鏡とセットにして神聖視するようなどころがあるということである。話が前後するが、『含象剣鑑図』は、剣のほかにも鏡の図をのせ、それぞれの神聖性を

を語る文章を記している。この史料は、この書のタイトルからもわかるように、剣を鏡とセットにしているところに大きな特徴がある。

ほかにも、北宋の李昉らが『太平広記』の中で、「凡そ道術を学ぶ者は須らく好き剣と鏡との身に随うことあるべし」<sup>(2)</sup>とも記している。

剣を鏡とセットにして神聖視する思想は、後に日本において、剣と鏡と勾玉からなる三種の神器（当初は、剣と鏡の二種の神器であったとする説もある）が代々天皇家に宝として伝えられていることを考える上で重要である。

天皇は後に神道といわれる日本古来の民間信仰の中で呪術王であったが、この呪具が三種の神器であったと考えられる。中国道教が日本神道に与えた影響、その中でも天皇にかかわることに与えた影響については、福永光司氏の研究により明らかにされている。

古代中国道教において剣が鏡とセットにされているということと、これらの呪術性は、日本刀剣思想とのつながりにおいて、

ここで特に注目しておかなくてはならないことである。

#### 〈註〉

(1) 福永光司『道教思想史研究』岩波書店、一九八九

福永光司『道教と古代日本』人文書院、一九八七、他。

(2) 『含象剣鑑図』に記された剣の陽（景）面には、北斗七星のほか、「日月歳星春熒惑星夏鎮星李太白星秋辰星冬」という銘文が刻まれている。この文は、占星術のテキスト的存在である『淮南子』「天文訓」にある記述と同じである。

(3) 秦の始皇帝の命令で、徐福という道士が数千人の童男童女をつれて不老不死の薬を求めて旅した話は有名である。しかし、金丹は現代科学において毒薬であることは明らかであり、唐代の皇帝が複数人これを服して死亡したといわれている。これにより金丹の服用は衰退していく。

(4) 『雲笈七籤』卷之八十四

(5) 『太平広記』卷三百三十一